

虫さされにご注意!

「虫さされ」は身近な皮膚病で、かゆみの強い赤いブツブツという印象があると思います。ヒトに被害を与える「虫」の種類や生態、生息地を知り、どんな虫がどんな皮膚症状を引き起こすかを知っておくと役に立ちます。

Q1 虫さされの原因となる虫はどんな虫？

皮膚炎を引き起こす原因となる主な虫としては蚊、ブユ、ハチなどの昆虫類、そしてダニ、ムカデなどの節足動物が挙げられます。

「吸血する虫」としては蚊、ブユ（ブヨ）、「刺す虫」としてはハチ、「咬む虫」としてはムカデが代表的です。

Q2 虫さされの皮膚症状は？



虫さされによって生じる皮膚症状には、「痛み」と「かゆみ」があります。痛みには、虫が皮膚を刺したり咬んだりすることによる物理的な痛みと、皮膚に注入される物質の化学的刺激による痛みがあります。

かゆみは、皮膚に注入された物質（毒成分や唾液腺物質）に対するアレルギー反応によって生じます。そして、アレルギー反応には、即時型（すぐに起こる）反応と遅延型（ゆっくり起こる）反応があります。即時型反応は、虫の刺咬を受けた直後からかゆみ、発赤、ジンマシンなどが出現し、数時間で軽快する反応です。遅延型反応は、虫の刺咬を受けた1～2日後にかゆみ、発赤、ぶつぶつ、水ぶくれなどが出現して、数日～1週間で軽快する、という反応です。これらのアレルギー反応は、虫に刺された頻度やその人の体質によって症状の現われ方に個人差が大きいのが特徴です。

Q3 虫さされの全身症状は？

刺された後に強いアレルギー反応が起こって、全身にジンマシンが出たり、気分不良や腹痛、意識消失などが生じることがあります。特に注意が必要なのはハチで、中には刺されて30分以内にショック症状をきたす特異体質の人がいます。

Q4 蚊に刺されたらどうなる？

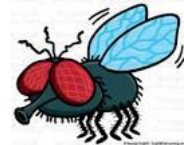
蚊は体長5mm前後で、メスは皮膚に止まって吸血します。通常は顔、手足などの露出部を刺します。蚊は人家周辺、山野など、どこにでも生息しますが、庭や公園などではヤブカ類のヒトスジシマカ、室内ではイエカ類のアカイエカが多いようです。蚊に刺された場合の皮膚反応は、刺されてすぐに出現する発赤、かゆみ（即時型反応）と、刺されて1～2日で出現す



る発赤、かゆみ（遅延型反応）があります。これらの反応は年齢と共に変化します。一般に乳幼児期には遅延型反応のみ、幼児期～青年期には即時型反応と遅延型反応の両者、青年期～壮年期には即時型反応のみが出現し、老年期になるといずれの反応も生じないとされますが、個人差がかなりあるので一概にはいえません。

Q6 ブユに刺されたらどうなる？

ブユ類は体長2～4mm程度の小型のハエのような吸血性の虫です。ブユは地域によってはブヨ、あるいはブトとも呼ばれており、高原や山間部の溪流沿いに多いため、野外レジャーの際に刺されます。ブユは朝夕に活動することが多く、特に露出したスネ付近を刺される人が多いようです。通常は刺されている時は痛み、かゆみをほとんど感じず、刺されて半日くらいすると刺された所が赤く腫れて次第に激しいかゆみを生じます。そして、赤いしこりができて長く残る人もいます。



Q7 ダニに刺されたらどうなる？

イエダニ類は体長0.7mm前後ときわめて小さい上に、寝ている間に布団に潜り込んで吸血します。古い一戸建てで、ネズミが生息するような家で被害がしやすいようです。顔や手足はほとんど刺さず、わき腹や下腹部、ふとももの内側などを刺して、かゆみの強い赤いブツブツができます。山でのハイキングや野外レジャーの際にマダニ類による刺咬を受けることがあります。マダニ類は体長1～3mmで、本来は野生動物に寄生していますが、ヒトの体に取りついて、わき腹やふともも陰部などの皮膚に咬みついて吸血します。数日後にはダニの腹部が数大に膨らみ、飽血状態となって脱落します。無理に引き抜こうとすると、頭部が皮膚に残って炎症を起こすことがあります。また、ダニの種類によってはライム病や日本紅斑熱などの感染症を媒介することがあります。



Q8 ハチに刺されるとどうなる？

刺すハチとしてはミツバチ、アシナガバチ、スズメバチが代表的です。ミツバチに刺されるのは養蜂家の方が多く、一般人が刺されることは稀です。アシナガバチやスズメバチの場合は、庭木の手入れや農作業、林業、ハイキングなどの際に刺されることが多く、特に秋の野外活動での被害が多いので注意が必要です。



ハチに刺されると、まず激しい痛みが出現し赤く腫れます。これはハチ毒の刺激作用によるもので、初めて刺された場合、通常は1日以内に症状は治まります。2回目以降はハチ毒に対するアレルギー反応が加わるため、刺された直後からジンマシンを生じたり、刺されて1～2日で強い発赤、腫れを生じたりします。この反応には個人差が大きいですが、ひどい場合は刺されて30分～1時間で意識消失や血圧低下などを生じて、死に至ることがあります。これはアナフィラキシーショックと呼ばれる症状で、ハチ刺されによる死亡はこの特殊なアレルギー反応によるものです。

Q9 ハチ刺されの対策

まず、ハチに刺されないようにすることが重要で、ハチにいたずらをしたり、むやみに巣に近付かないようにしてください。特に夏～秋はハチの活動が活発になる時期なので注意してください。香水やヘアスプレーなどの香りはハチを刺激することがあるので、野外レジャーの際には避けてください。刺された場合は、安全な場所で静かに横になって、できれば局所を冷やしてください。アンモニアを塗る、という昔からの方法がありますが、実は全く効果がないのでやめてください。ジンマシンや腹痛、気分不良などの症状が認められた場合は直ちに救急車を呼ぶ必要があります。ハチに刺されてショック症状を起こす可能性のある方には、緊急時に使用する「エピペン」というアドレナリン自己注射薬を携帯しておく方法があります。これは健康保険が適用されず、自費診療の扱いとなります。まずエピペンを処方することのできる専門の登録医の診察を受けていただく必要があります。

Q11 虫さされの治療はどうすればよいの？

虫さされの治療は、軽症であれば市販のかゆみ止め外用薬でもよいですが、赤みやかゆみが強い場合はステロイド外用薬が必要です。症状が強い場合は抗ヒスタミン薬やステロイドの内服薬が必要になるので、皮膚科専門医を受診するのがよいでしょう。ただ、これらの治療はあくまで現在の皮膚症状を抑えるのが目的であり、原因虫からの回避、あるいはその駆除対策を実施しなければ新たな虫さされの症状が現れる可能性があります。



Q12 虫さされの予防はどうすればよいの？

原因となっている虫の種類によって違います。室内の蚊、イエダニなどの駆除には燻煙殺虫剤が有効ですが、気密性の低い家屋ではあまり効果ができません。イエダニの場合はその宿主であるネズミの駆除が必要です。吸血性の節足動物に対する予防対策として、野外活動の際には肌を露出しないことが重要です。また、携帯用蚊取りや、防虫スプレーなどの忌避剤を用いることで、ある程度の防除は可能です。虫除け剤（忌避剤）の代表であるディートには、小児に対する使用上の注意として、顔には使用しないこと、生後6ヶ月未満の乳児には使用しないこと、2歳未満の幼児では1日1回、2歳以上12歳未満の小児では1日1～3回の使用にとどめることなどがあります。必要に応じて適切に使ってください。